



慶應義塾大学 HAPP 新入生歓迎行事

平家琵琶の調べ

-日本人の心の原点「無常」に触れる-

日時 令和3年5月8日午後2時～午後3時30分
曲目 「祇園精舎」「卒塔婆流」「大塔建立」、「那須与一」
演奏 平曲弾き語り奏者 荒尾 努



平曲(平家琵琶)の概要

参考文献 金田一春彦著『平曲考』(三省堂刊)

皆さんは、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の名作『怪談』をご存じでしょうか。この中で、「耳なし芳一」が平家の亡霊達の前で演奏したのが、『平家物語の詩章に節をつけて、琵琶の伴奏で歌う、平曲と呼ばれるものです。

「平家物語」という古典文学作品は、元来は琵琶という楽器を伴奏として語る、語り物の音楽の詞章であった。語り物としての「平家物語」を『平家琵琶』といい、略して平家とも言われ、現在では、ふつうには『平曲』といわれる。平曲が生れたのは、「徒然草」の二二六段に書かれているものが通説とされている。それによれば、生仏という盲僧が藤原信濃前司行長という公卿の作った物語を、天台宗の仏教歌謡の曲調によって語ったのが初めといわれる。平曲は、鎌倉時代に生仏という盲人の法師が歌い始めたものと伝えられ、室町時代に全盛期を迎えますが、明治に入ると衰え、第二次大戦が終わる頃には、平曲二百曲全部語れるのは、仙台の館山甲午氏だけになっていました。その館山氏から昭和十年代に、古くから伝わる平曲を伝授されたのが、国語学者・金田一春彦氏です。館山氏はその後、自らの工夫で平曲の歌い方を独自に変えてしまいましたので、金田一春彦氏が、伝統的な平曲の唯一継承者となっております。

そして、この正調平家琵琶は館山甲午、金田一春彦、須田誠舟と伝えられ、荒尾努氏は、須田誠舟氏に師事し、研鑽を積まれています。

平曲 小秘事「祇園精舎」解説

須達(しゆだつ)長者が釈迦とその弟子に寄進した寺「祇園精舎」の諸堂に鳴り渡る鐘の音には、世の中の一切のものは常に変化し生滅して、永久不変なものはないという諸行無常の響きがある。釈迦が入滅した時、鶴のように白く枯れ変じたという釈迦の病床に相對して生えていた二本の沙羅の木の花の色は、無常なこの世では、栄花を極めていた者も必ず衰えるときがあるという盛者必衰の道理を表している。



「祇園精舎」

小秘事

(中音)

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理を表す

(初重)

奢れる者久しからず

唯春の夜の夢の如し

(重初重)

猛き人も終には滅びぬ

偏に風の前の塵に同じ

平曲 五句物「大塔建立」



解説「大塔建立」

平家一門の尊崇を集めた巖島神社、平清盛が海中に朱塗りの美しい社殿を建立した契機となった物語が大塔建立である。清盛の娘徳子に皇子誕生を願った清盛は信仰する巖島に祈りをささげ、ついに後の安徳天皇の誕生をみたのであった。清盛がここまで巖島を尊崇したのは、高野山の大塔を修理し、その際に出会った老人の進言であった。老人は巖島の荒廃を歎き、清盛に巖島をも修理すれば、平家一門は並ぶ者がいないほど繁栄するといひ、姿を消した。清盛はその老人と言葉を信じ、高野山では今でも残る

血曼荼羅を描き、巖島を大改修し、今の形の巖島を完成させた。そして、参詣した際の夢の中で、巖島の大明神より、宝剣を賜った。但し、巖島の大明神はもし悪行があったなら、繁栄は子孫にまでは及ばないと忠告したのであった。

歌詞「大塔建立」

前略（素声）そもそも平家巖島を信じ初められける事をいかにといふに、清盛いまだ安芸の守たりし時安芸の国を以って、高野の大塔修理せられけるに、渡邊の遠藤六郎頼方を雑掌に付けられたり、六年に（ハツミ）修理終んぬ（口説）修理終わつて後、清盛高野へ登り大塔拝み奉つて奥の院へ参られけるに、何国より来たれる共なく白髪たる老僧の眉には霜を垂れ、額に波をたたんで、かせ杖のふたまたなるにすがつて（下ケ）出給ひけるが、この僧何となふ物語をぞ仕たりける（折声）夫我が山は昔より密宗をひかへて退転なし、天下に又も候らはず、大塔既に修理終り候らひぬ（口説）夫に付候らひては越前の氣比の宮と安芸の巖島は両界の垂迹にて候ふが、氣比の宮は栄えたれ共、巖島はなきが如くに荒れ果てて候、あはれ同じうはこの序に奏聞有つて、巖島をも修理せさせ給へかし、左だにも候らば、官加階は（コハリ下ケ）天下に肩を双ぶる者、又もあるまじきぞとて立たれける（中音）この老僧の居給へる所に、異香則薫じたり、人を付けて見せらるるに三町斗りは見え給ひて、その後はかき消す様に失せ給ひぬ～中略～（口説）其後都へ上り院参してこの由奏聞せられたりければ、君も臣も斜ならず御感有りけり、猶任を延べて、巖島をも修理せらる、鳥居を立て替へ、社々を作りかへ、百八十間の回廊をぞ作られける、修理終わつて後、清盛巖島へ参り、通夜せられける夢に、御宝殿の中よりびんづら結ふたる天童の出でて、汝この剣をもつて朝家の御固めたるべしとて、白銀の蛭巻したる小長刀を賜はるといふ夢を見て（コハリ下ケ）覚めて後見給へば、現に枕上にぞ立つたりける（折声）さて大明神御託宣有つて、汝知れり忘れりや、或聖を以つて言はせし事は（初重）但し悪行あらば子孫迄はあるまじきぞとて、大明神あがらせ給ひけり、有りがたかりし事どもなり

卒塔婆流

解説

反平家の密議鹿谷の陰謀は平家の知るところとなり、謀反を起こした人々は斬首されたり、島流しにされたりしました。僧俊寛、康頼入道、藤原成経の三人は喜界が嶋へと流罪になりました。流罪になった康頼と成経は都を恋しく思い、嶋の似た場所を熊野権現に見立て、篤く信仰しました。ある日、通夜して見た夢の中で、千手観音のご利生があることを知り、また御熊野のなぎの葉にもお告げがあり、康頼入道は千本の卒塔婆をつくり、その卒塔婆に阿字の梵字、年号月日、仮名実名、二首の歌を書いて、海に流しました。そのうちの一本の卒塔婆が不思議にも巖島に流れ着きました。そのとき、たまたま巖島を訪れていた康頼ゆかりの僧がその卒塔婆を拾い上げ、都へと持ち帰り、康頼入道の母の下へと届けました。その話は後白河法皇の耳にも届き、法皇がそれを聞くと涙を流されました。法皇は清盛公の嫡男重盛公にこのことを話され、重盛公は父清盛公に話されると、清盛公も憐れに思われました。



語り

(口説) さる程に二人の人々、常は三所権現の御前に通夜する折もありけり、或夜通夜して終夜今やう歌われけるが、暁方苦しさにちっとも打ちまどろみたりつる夢に、沖よりも白ひ帆かけたる小舟を一艘汀へむひてぞ漕ぎ寄せさせ、舟の中より、紅みの袴着たりける女房達(下ケ)二三十人渚に上がり、鼓を打ち、声をととのへて(中音)万の仏の願よりも千手の誓ぞ頼もしき、枯れたる

草木もたちまちに、花咲実なるとこそ(中ユリ)聞けど、推し返し、三辺歌ひ澄ましてかき消すやうにぞうせにける(折声)康頼入道、打ち驚き奇異のおもひをなして、いかさまにも是は龍神の化現とおぼえ候ふ(白声)三所権現の内、西の御前と申し奉るは、本地千手観音にておはします、龍神は又千手の二十八部衆のその一つにてましませば、以って御納受こそ(ハツミ)頼母しけれ(口説)或夜又二人に通夜して、先のごとく終夜いまやう歌われけるが、暁方苦しさにちっとも打ちまどろみたりつる隙に、沖よりも吹き来る風の二人が袂に、木の葉を二つ吹きかけたり、何となふ是をとつて見ければ、御熊野のなぎの葉にてぞありける(下ケ)彼二つのなぎの葉に、一首の歌を虫喰にこそしたりけれ(上歌)千早振 神に祈りの 繁ければ などが都へ 帰らざるべき(指声)康頼入道、故郷の恋しさの余りに千本の卒

塔婆を作り、阿字の梵字、年号月日、仮名実名、二首の歌をぞ書付ける（上歌）薩摩がた 沖の小島に（下）我ありと 親には告げよ 八重のしおかぜ（下歌）おもひやれ、しばしとおもふ旅だにも、猶故郷は恋しきものを（下ケ）是を浦にもって出でて（折声）南無帰命頂礼、梵天帝釈、四大天王、堅牢地神、王城の鎮守、諸大明神、別しては熊野の権現、安芸の巖島の大明神、せめては一本なりとも都へ伝へてたべとて（初重）沖津白浪のよせては帰る旅ごとに、卒塔婆を海にぞうかべける（中音）卒塔婆は造り出だすに随って、海に入れければ、日数積もれば、卒塔婆の数もつもりにけり、そのおもふこころたよりの風とも成りたりけん、又神明仏陀もや送らせ給ひたりけん、千本の中に一本安芸の国巖島の大明神の御前の渚に打ち上げたり（口説）ここに康頼入道がゆかり有りける僧の、もし然るべき便りもあらば、彼嶋へ渡ってこの行方をも尋ねんとて、西国修行に出でたりけるが、先巖島へぞ参りける、ここに宮人とおぼしくて、狩衣装束なる俗一人出で来たり（下ケ）この僧、何となう物語をしける程に（折声）それと光、同塵の利生さまざまなりとは申せども、この御神は、いかなるける因縁を以って、海漫のうろくづに縁をば結ばせ給ふらんと、問ひ奉まつれば（指声）是はよな娑竭羅龍王の第三の姫宮、胎蔵界の垂迹なり、この嶋へ御影向ありし始めより、濟度利生の今に至るまで、じんじん奇特の事をぞ語りける（中音）さればにや、八社の御殿、いらかをならべ、社は海神のほとりなれば、汐の満干に（中ユリ）月ぞすむ、汐満ちくれば、大鳥居、あけの瑞籬、瑠璃のごとし、汐引きぬれば、夏の夜なれども、御前の白州に霜ぞおく（素声）いよいよ尊く覚えていたるところに、漸々日くれ月差出でて、汐の満ちけるにそこはかたなくゆられ寄り来る藻屑どもの中に、卒塔婆のすがたの有りけるを、何となづ是をとつて見ければ、沖の小島にわれ有りと書き流せる言の葉なり、文字をば彫入れ刻み付けたりければ、波にも洗はれずあざあざとしてこそ（ハツミ）見えたりけれ（口説）この僧不思議のおもひとなして、笈のかたに指し都へ帰り上り、康頼入道が老母の尼公妻子ども的一条の北、紫野といふところに忍びつつ、隠れ居たりけるに、是を（半下ケ）見せたりければ（初重）さらばこの卒塔婆がもろこしの方へもゆられ行かずして、何しに是迄伝へ来て、今更ものをばおもはすらんとぞ悲しみける（口説）はるかか叡聞に及んで、法皇是を叡覧有って、あな無慚、このものどもが命のいまだ生きて有るにこそとて、龍眼より御涙流させ給ふぞかたじけなき、是を小松の大臣の許へ（下ケ）つかはされたりければ、父の禅門に見せ奉まつらる（三重甲）柿の本の人丸は（上）嶋隠れゆく船をおもひ（甲）山の辺の赤人は（上）芦辺の田鶴をながめつつ（下り）住吉の明神は、片そぎのおもひをなし、三輪の明神は杉立てる門をさす、むかしすきのをの尊、三十一字の大和歌をはじめ給ひしよりこのかあ、もろもろの神明仏陀、彼詠吟によつて、百千万端のおもひを述べ給へり（初重）入道相国も、岩木ならねば、世にあはれげにこそ、のたまひけれ

平曲 拾物「那須与一」



解説

寿永4年（1185年）2月、讃岐屋島へ逃れた平家を追って、義経は海路阿波に上陸、陸路屋島に迫り、背後から平家を急襲した。驚いた平家軍は、船に乗って海へ逃げたが、源氏軍が案外少数と知って応戦し激しい攻防が繰り返された。日が暮れて両軍が兵を引きかけている時、沖の平家軍から年若い美女を乗せた小舟が一艘漕ぎ寄せてきた。美女は、紅地に金の日輪が描かれた扇を竿の先にはさんで船べりに立て、陸の源氏に向かって手招きをしている。これを見た、義経は、弓の名手・那須与一宗高に扇を射抜くよう命令した。

与一は、馬を海に乗り入れたが、扇の的までは、まだ40間（けん）余り（約70メートル）もあり、しかも北風が激しく吹いて扇の的は小舟と共に揺れている。「南無八幡」と心に念じた与一が渾身の力で鎬矢を放つと、矢はうなりを立てて飛び放たれ見事に扇の要近くに命中。扇は空へ舞い上がり、ひらひらと海へ落ちた。この様子を固唾を飲んで見守っていた源平両軍は、どっと歓声を上げて与一を褒め讃えたのであった。



語り

～前略～

（下り）沖には平家、船を一面にならべて見物す。陸には源氏くつばみを揃へて是を見る。いづれもいづれも晴ならずと（呂）いふ事なし。与市（下音）目をふさいで南無八幡大菩薩、別しては我国の神明（上音）日光の権現、宇都の宮那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の真中射させてたばせ給へ、射損ずる程ならば弓切り折り自害して、人に二度面を向ふべからず、今一度本国へ帰さんとおぼしめさば、この矢外させ給ふなところの中に祈念して、目を見開ひたれば、風少し吹きよわつて、あふぎも射よげにこそ（呂）成りにけれ。与市（下音）かぶらをとつてつがひ、よつ引いてひやうど放つ。小兵といふ条十二そく三ぶせ（上音）弓は強しかぶらは浦響く程に長鳴りしてあやまたず、扇の要際一寸ばかり置て、ひいふつとぞ射切たる。かぶらは海に入りければ、あふぎは空へぞ揚がりける。春風に（走三重）一もみ（上音）二もみもまれて海へさつとぞ散たりける。皆紅の扇の日出ひたるが夕日にかかやいて、白波のうへに浮ぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家、船端をたたいてかじたり。陸には源氏、箆をたたいてどよめきけり。



荒尾 努 (プロフィール)

平曲(正調平家琵琶)弾き語り奏者。1979年東京生れ。1999年故金田一春彦先生・須田誠舟先生の下で、平曲を学び始め、指導を受ける。現在は、慶應義塾大学法学部政治学科を卒業後、**三菱重工業(株)防衛・宇宙セグメントに勤務**。数少ない平曲継承者として、一人でも多くの人に平家の語りを聞いてもらうため、平家一門の素晴らしさを伝えるために、平家ゆかりの巖島神社、六代御前墓所や京都の地蔵寺を始め、全国の神社仏閣、各種教育機関(全国の小中学校、大学や教科書)、NHK大河ドラマ「平清盛」展など平家に関連する各種イベントを中心に年間50回近くの演奏、講演活動を行っている。また、2005年からは**宮島観光大使**に就任、2007年からは**慶應義塾大学非常勤講師**となり、活躍の場を広げている。2014年からは平家伝習所を開設し、弟子の育成に当たっている。2016年にはロシアのチャイコフスキーモスクワ音楽院から招聘を受け、活動の場を世界に広げている。

NHK総合テレビ「探検ロマン世界遺産」やWOWOW「美術のゲノム」などにも出演、映画「禅 ZEN」で琵琶演奏を担当するなどメディアでも活躍中。

平家琵琶ホームページ <http://homepage3.nifty.com/heikebiwa-arao/index.html>

主な演奏活動

- ・奈良国立博物館・東京藝術大学大学美術館「巖島神社国宝展」にて平曲公演
 - ・宮崎県椎葉村「椎葉平家まつり『法楽祭』」にて平曲を演奏
 - ・JR西日本主催ディスカバリーウエスト「瀬戸内歴史海道」企画で、巖島神社千畳閣で平曲演奏
 - ・日本旅行主催「瀬戸内歴史海道～古の音色～」企画で、巖島神社千畳閣で平曲演奏
 - ・声優羽佐間道夫氏、近石真介氏らとともに「口伝平家物語」に出演
 - ・京都文化博物館、広島県立美術館主催による特別展「NHK大河ドラマ50年「平清盛」」にて平曲を演奏
 - ・第341回JTB旅行文化講演会に出講
 - ・岡山後楽園のイベント「秋の誘い庭園・オープニング・点灯式」に出演
 - ・NHK大河ドラマ「平清盛」のエンディング清盛紀行に出演
 - ・第341回JTB旅行文化講演会に出講
 - ・山陽・九州新幹線直通運転1周年記念フェスタ
 - ・NPO日本文化塾主催・天心・六角堂復興プロジェクト後援で、五浦観光ホテル、震災にあった六角堂で演奏
 - ・巖島神社奉納演奏10周年特別企画「平家とともに～平家の愛した巖島で八百年続く平家の語りと琵琶の調べを～」を開催し、世界遺産・国宝巖島神社高舞台上で奉納演奏
 - ・惟喬親王惟喬親王1120年鑽仰御遠忌大法要で大原寂光院にて平曲奉納演奏
 - ・ロシアチャイコフスキーモスクワ音楽院招聘「平曲・平家琵琶」演奏会、講演会
 - ・京都「古典の祭典2016『平曲(平家琵琶)～平家の語りと琵琶の調べ～』」に出演
- ※京都寂光院、高野山大円寺、神戸須磨寺、島根辰光寺、金沢宝円寺などでも演奏(現在総演奏数900回ほど)

定期演奏会

- ・春、秋の彼岸会「桂地蔵(地蔵寺)奉納演奏」(京都市桂地蔵、3/20・9/20)
- ・六代御前供養祭(神奈川県逗子市六代御前墓所、7/26)
- ・京都六地蔵盆奉納演奏(京都市山科地蔵・桂地蔵、8/22)
- ・平家物語講読会(横浜そごう9Fミーティングルーム、年12回)

教育現場での主な活動

- ・光村図書出版 教科書「国語(中学2年生)」
- ・光村図書出版 教科書「国語(小学5年生)」
- ・数研出版 高校教科書「国語」
- ・正進社 中学国語補助教材「新・国語便覧」
- ・吉野教育図書「教科書の確認(中学2、3年生)」
- ・東京書籍 国語教材(平家琵琶写真を掲載)
- ・慶應義塾大学「日本文化I」和楽器責任者
- ・広島経済大学特別公開講座
- ・文部省研究開発指定校「宮島学園」
- ・少年新聞社「図書館教育ニュース」
- ・ラボ教育センター
- ・朝日カルチャーセンター

※全国各地の小中学校、大学に出講

メディアでの主な出演

- ・NHK総合テレビ「探検ロマン世界遺産」
 - ・日本経済新聞文化面特集記事(2011年5月26日)
 - ・日本テレビ系列「ズームイン!!サタデー」
 - ・映画「禅 ZEN」琵琶演奏担当
 - ・WOWOW「美術のゲノム」
 - ・テレビ朝日、BS朝日「街道物語」
 - ・NHK広島放送局「お好みワイド」
 - ・NHK福岡放送局「福岡いちばん星」
 - ・NBC長崎放送局「報道ステーション」
 - ・FBS福岡放送「夢にエール！」
 - ・NHKラジオ「秋・広島にきてみんさい」
 - ・広島エフエム「宮島管絃祭プロlogue平清盛」
- ※各地方局のラジオ、テレビ、新聞等に出演



平曲とは「平家を語り、琵琶を弾じる。盲目の琵琶法師によって語り継がれてきた八百年続く日本の伝統文化。」です。小泉八雲著の怪談「耳なし芳一」で芳一が平家の亡霊たちの前で弾き語っていたものです。現在では継承者が数名しかいない貴重な日本の伝統文化となっています。平曲は平家物語しか語りません。亡くなった平家一門の人たちを慰めるために生まれ、鎌倉時代初期に信濃前司行長が書き表し、盲目の僧『生仏』に読み語らせたのが始めと言われています。

平家一門の素晴らしさ、優しさ、温かさを伝えたい

平曲は八百年の間、減びることなく脈々と伝えられてきました。家族を愛し、親が子を愛し、子が親を愛し、人の死に涙し、敵味方関係なく、敬意を払い、生をむさぼらず、絆や縁を大事にし、何より人を疑わず、信じ、信じ続けた。私はそんな人の痛みのかかる心優しい平家一門の心を語り継ぎたい。

平曲を通して感じること

- 一、日本語の美しさ(日本語独自の情景描写などの美しさ)
- 二、日本の歴史を知る大切さ(自国の歴史や文化を知ることの重要性。)
- 三、想像力の豊かさ(耳で聞いて、頭で想像する。想像力の無限性。)